

展覧会カタログと現代美術

松本 透

展覧会カタログに求められるのはふつう記録性、学術性、デザイン性（それは商業性とも結びつく）などであろう。美術館黎明期（1950年代）のカタログは小冊子程度のものが多かったが、テキストや図版がない場合でも出品作品リストだけは付いていた。記録性（文字と図版による）は、カタログという出版物に特有の不可欠要素なわけである。また展覧会カタログは、長いあいだ正方形に近い版型やまばらな活字組みなどの定型から脱することがなく、デザイン面の質の向上はむしろ立ち遅れたが、その一因として、美術館のいわば独占販売物であるカタログには競争相手がいない、といった事情があったかと思われる。展覧会のおまけのように思われがちなかたログに学術性が求められるようになったのはさらに遅い。それは、だいたい1970年代末頃からであろう。

以上の要件は、現代美術展のカタログにそっくりそのまま当てはまるわけではない。まず記録性。出品作品の文字データはともかくとして、近年の美術の趨勢であるインスタレーションやビデオ・インスタレーション（とりわけその新作）の記録を図版のかたちで収録しようにも、カタログにできることは限られている。出版を遅らせる、展示風景のフォト・ドキュメントを別冊で作る、ビデオ映像のディスクを付録でつけるといった、いずれも一長一短のある間に合わせの手立てがあるばかりだ。記録性を徹底させようとする、往々にして展覧会に合わせて出版されるべきカタログという枠組みや、書籍としての枠組みと衝突したり、それを破ったりせざるをえないのである。学術性について。現代美術展の開催やカタログ制作においても、学術的関心・調査研究・方法（資料批判など）等がベースとなるのが望ましいが、とはいえ現代美術の調査研究はおおむねフィールド・ワークの段階を出ないであろうし、また、高度な学術性がただちに現代美術展に求められる批評性に繋がるわけではない。批評性の問題は本発表の枠をはるかに越えるからここで詳しくはふれないが。ではデザイン性はどうか。デザインの良し悪しはあくまでも内容との関係に即してはかられるべきであることを考えると、作家がコンセプトの、あるいはスタイルの個性を競い合う現代美術展（とりわけ個展）のカタログにおいて、デザイン的にも思い切った試みがなされるのは当然であり、これについてはめざましい例を、あとでいくつかお見せしたい。

さて、以上略述したことからもたぶん察していただけるように、現代美術のなかには、

展覧会カタログという器、あるいは書物という器に収まりきれないさまざまな要因が潜んでいる。いくつか顕著な例をひろいながら、展覧会カタログと現代美術の共犯、離反の諸相を見ていきたい。

略歴

松本 透(まつもと とおる)

1955年東京生まれ。1980年京都大学文学研究科大学院修士課程修了(美術美術史学専攻)。同年より東京国立近代美術館に勤務。担当した展覧会として「現代美術における写真」展(1985年)、「カンディンスキー展」(1987年)、村岡三郎展(1997年)、草間弥生展(2003年)、「アジアのキュビズム」展(2005年)など。共著書に『芸術の理論と歴史』(思文閣、1990年)、編著書に『日本近現代美術史事典』(東京書籍、2007年)、訳著書にS.リングボム『カンディンスキー - 抽象絵画と神秘思想』(平凡社、1995年)などがある。